DYING AND LIVING IN CHRIST

BY

Rev. KOTA HOSHINO
PASTOR OF RYOGOKU & SHIBA CHURCHES

基督信徒の一死一生

星野光多君述

東京 警醒社書店

259
448

特51
264

基督信者の一死一生

星野光多述

此は普通の意味にての肉身の生死を云ふので、基督を信ずる者のみ實驗する所の特別なる意味に結合する者のみ實驗する所の特別なる意味で通常吾人の肉身につきて云ふ時は生が先きで死が後に來るが、基督に屬する者の實驗するものは死が先きで生が後に來る。抑も基督を信ずる者の實驗する此一死一生は實に高尚なる實驗であつて此事柄たる亦實に神秘的である。故にその信仰生活に於て多少靈的實驗を味へる者ならでは此事は到底理解することが出來ぬ。又吾人の筆も口も此高尚にして神秘なる經驗を語るには不充分を免れぬ。併し神靈の啓發を仰ぎながら吾人の茲に語る所

49 7 19
交内

が、少しでも此神秘的實驗を説明する助けとならば吾人は大滿足を感ずる次第であつて吾人が此に論ぜんと欲する所は下の數點である。第一基督と信者の關係の極めて密切なること。第二基督の死には信者の死も含まるゝ事。第三基督の復活には信者の復活も含まるゝ事。

第一　基督と信者の關係の極めて密切なること

聖書中代表者と被代表者の關係を以て此關係を説明する所もあるが、此はその關係の或る方面を適當に表示するには相違ないが結局此表式丈けでは不充分である。何故なれば代表者と被代表者との間には只或る利害のみ關係して居つて生活の全部が關係して居らぬ場合が甚だ多い。

次に聖書中、基督を第二のアダムと稱して祖先と子孫の關係を以て此關係を説明する所もあるが、此も不充分な所がある。先祖の功績により後世子孫が榮爵を受くることあるが如く、基督の十字架の功績によりて凡て彼を信ずる者は萬世の後までその恩澤に浴し罪の赦を得て神の子とせらるとすることは實際眞理には相違ないが、これ丈けでは基督と信者の密接なる關係は兎ても充分に表示せられては居らぬ。

然らば如何なる表式が此關係を最も適當に表示するかと云ふに幹と枝との關係頭首と肢體との關係こそ則ち是である。「我は葡萄樹爾曹は其枝なり。」(約翰一五の五)とは主自らがその弟子との親密なる關係を表示したる表式であつて、此表式によればその幹絶たれてその枝獨り生き殘ると云ふことはなく、幹が枯るれば枝も枯るゝ通り

に、幹の生命が回復すれば枝の生命も亦回復するのが自然である。すなはち幹と枝との間には生死的關係がある、共通的生死がある。眞實に基督を信じ又愛する者の、彼に在りて經驗する所また斯くの如くあらねばならぬ。

使徒パウロは主イエスの此表式よりして更に別名同質の表式を案出して此神秘的關係を表示した。彼曰く「體は一にして多くの肢あり一體の凡の肢は多けれども一の體なりキリストも亦此の如し、、爾曹はキリストの體にして亦各々その肢なり」(哥林前一二の三、二七)と。又曰く「我儕は彼が身の肢なり、彼が肉より出彼が骨より出たり」(以弗五の三〇)と。基督を頭首とし信者を四肢百体となす、此表式は彼と彼に在る者との密切なる關係を適切に表示するものと云ふべきである。此場合に於ては相互の利害休戚が悉く共同一

致して居る。頭首の苦痛は獨り頭首のみの苦痛でない、亦四肢百体の苦痛である。四肢百体の快樂は獨り四肢百体のみの快樂でない、また頭首の快樂である。

基督と信者との此神秘的關係を稱して吾人は之を一致合体と云ふ。此一致合体如何にして成立する歟。是れ彼にありては、無限の愛を以て吾人を愛し、その十字架の贖と、恩寵の語と、新にする聖靈とを以て、吾人に臨み給ふことに因り、吾人にありては、痛切なる罪の悔改と、誠實なる信仰と、僞りなき愛とを以て、彼を信じ愛し、彼にその身も心も献ぐることによりて自ら成立するものである。「爾曹我に居去らば我また爾曹に居らん。」(約翰一五の四)此は此密切なる關係の成立する由緣を示したるイエスの語である。此の不思議なれども而かも確實なる關係が基礎となつて吾人基督を信ずる者の神

秘的一死一生が實驗的事實となつて來るのである。

第二　基督の死には信者の死も含まる

「イエスキリストに合んとてバプテスマ受し者は即ち其死に合んと
て之を受しなるを爾曹知ざる乎。」(羅馬六の三)　嗟バプテスマは死し
て葬らるゝの表式である。凡てキリストを信じてバプテスマを受く
る者には此覺悟がなくてはならぬ。只生きんが爲め救はれんが爲め
にキリストを信ずと云ふ丈けでは眞に彼を信ずる者の所爲でない。
バプテスマを活され又救はるゝ表式とのみ心得て之れを受くる者は
彼のヤコブとヨハネの母が主イエスの許に來り竊かに「此二人の我
子を爾の國に於て一人は爾の右一人は爾の左に坐ることを命せよ」

(馬太二〇の二一)と懇願した古事にも似て居て頼母敷くない。彼等
は現世的名譽と利己的利害のためにイエスの權勢を利用せんと欲し
淺間しくもその母の盡力を煩はした次第である。主イエスは今や、
堪へ難き苦痛を味はんが爲め、十字架の死をさへ受けんが爲に都さ
して登らるゝに彼等はこんな呑氣な我儘勝手なる欲望を以てその心
を盈たして居つた。其時主は彼等に向つて何と宣ふたか。彼は彼等
に「爾曹は、求ところを知らず、爾曹は我が飲んとする杯をのみ又
我が受けんとするバプテスマを受け得るや」と反問し給ふた。嗚呼
主の飲み給へる杯は苦痛の杯、受け給へるは死のバプテスマであつ
た。主は今日も尙ほ唯自らの安全幸福のみを目的として彼に來る者、
神の子たる榮譽を得んが爲めの目的のみをもつて水のバプテスマを
受くる者に對つて、この反問を繰返し給ふのである。「爾曹は我が飲

んとする杯を飲みまた我が受けんとするバプテスマを受け得るや」と。

抑も基督を信ずる吾人に定められたることは、第一には彼が一たび死し給へるが如く吾人も彼と共に一たび死なねばならぬと云ふことである。彼と吾人の密接なる關係は此事を必然とするのである。果して然らば如何に死するや。此死實に神秘的であつて、不完全なる語と回らぬ筆にて説明することは到底出來ぬ。併し其大要は暗示し難きことでもない。吾人の理解する所によれば、眞に基督を信ずる者の彼に在りて實驗すべき死は凡そ左に掲ぐる諸狀態を含有するものと思はるゝ。

(一) 主は人類の罪惡故に非常なる苦痛を味ひ終に此罪惡故に死を受け給ふた。吾人も亦世の罪惡就中自己に存する生來の罪惡故に、非常にして堪へ難き苦痛を感じ、此罪惡の取除かるゝ爲には、身の死をも甘受せんとの覺悟を懷くべきである。蓋し此實驗は眞に主キリストを信じ又愛して彼と同情に入りたる者には、必然あるべき筈である。「我キリストに屬る者なれば我が言は眞にして僞なし且我良心聖靈に感じて我に大なる憂ある事と心に耐ざる痛ある事とを証す若し我兄弟我骨肉の爲にならんには或はキリストより絶れ沈淪に至らんも亦我願なり。」(羅九の一、二)。「爾曹の信仰を供物として献んには假ひ我が血を流して灌ぐとも我これを喜ばん。」(腓立二の一七)。「如此爾曹も我儕の主イエス、キリストにより罪に就ては自ら死るものまた神に就ては生るものなりと意ふべし。是故に爾曹罪を死べき肉體に王たらしめて其慾に徇ふ勿れ。」(羅馬六の一、三〇)「夫れキリストに屬する者は肉と其情及び慾とを十字架に釘たり。」(加拉五の二四。)

人と我とに存する罪惡を絶んために如何なる苦痛をも甘んずる心は主と偕に十字架を負ふの心であつて、實際之により吾人は日々に彼の十字架を負ひつゝあるのである。彼と偕に死つゝあるのである。

(二) 主は人類就中吾人の罪の詛を任ひて、十字架に磔られ、死して墓に葬られ給ふた。吾人彼の贖罪の功績の完全を信じ、彼を信じて我救主となすにより自らの罪は悉く彼によりて贖はれたることを滿足し安心し、天下何物を以てするも此信賴安心の念を攪乱することなからしむること是れ亦吾人の死である。蓋し吾人神の前に義とせられんが爲めに自らの心狀や行爲に心を用ゆる間は決して安心も滿足もあるべきはづがない。ヲヽガスチンにしても、ルーテルにしても、律法に對する義を自己の心掛や道德に於て得ようとして居つた間は少しも安心がなかつたが、一たびキリストの十字架が凡て彼

を信ずる者の罪と詛を取去つたと云ふことを會得した時始て海の如き安心が生じて來た。「我れキリストと偕に十字架に釘られたり」とは「世の罪を任ふ神の羔」を信ずる者の告白であつてキリストの十字架のみ吾人に罪の赦と全き救とを保証するものである。「イエスは我儕が罪の爲に解され又我儕が義とせられん爲に甦らされたり。是故に我儕信仰に由て義とせられたれば神と和ぐことを得たり此は我主イエスキリストに賴てなり。」(羅馬四の二五。五の一。)斯く全心もて彼の贖を信賴し凡て己れの心狀や行爲に寸毫の依賴心を懷かぬやうになることは精神的に云へば自己の死であつて是れ亦彼に屬する者の死である。

(三) キリストを信じ又愛する故を以て受くる迫害不利益等を甘受すること是れ亦彼にある者の死の一部である。モーセは「暫く罪の

樂を享んよりは寧ろ神の民と共に苦難を受けんことを善としキリストの爲に受る誹謗はエヂプトの貨財よりも寶貴と意へり。」（希伯一一の二五、二六。）とある。由來基督を信ずるものが偶々その信仰故に蒙る所の聊かの不利益や困難ゆへに失望したり又は嘶いたりするのは世の常であるが、斯くの如くにては吾人は兎ても基督の死に參る者と云ふことが出來ぬ。キリストに屬するものは此等のことを甘受するの覺悟がなくてはならぬ。讀者よ御身は曾て信仰故に此等のことを甘受したる事ありや。あらば御身はキリストの十字架に參與するの榮を分與せられたる者として感謝すべきである。

（四）此の如くにして知らずの間に世の勢力と罪惡より絶緣し之に對して全く無關係無頓着となること、換言すれば世の勢力と罪惡が曾て我が心と身の上に有したりし權威を取り毀ちキリストの靈入り代りて我内に主權を有するに至ること是亦基督に屬する聖徒の靈的死である。パウロは此狀態を形容して下の如くに云ふた。「然ど我には惟我等の主イエスキリストの十字架の外に誇る所なからんことを願ふ、此キリストに由て我世に向へば世は十字架に釘られ世の我に向ふも亦然り。」（加拉六の一四）

第三　基督の復活には信者の復活も含まること

「故に我儕その死に合バプテスマに由て彼と同に葬らるゝは、キリスト父の榮に由て死より甦されし如く、我儕も新しき生命に行べき爲なり。若我儕彼の死の狀に等からば亦彼の復生にも等かるべし。」（羅馬六の四、五。）基督は生命の主であつて、決して長く死に繫が

れて居るべき筈のものではない。彼の死は人類の罪ゆへに餘儀なくせられたる犧牲贖罪の死であつて、その贖罪事業を全ふしたる彼が直ちに死より甦りたるは寧ろ當然である。月影のために一方より缺け始めて一時全然光輝を失ふたる日輪が、轉て他の一方より盈ち始めて終に元の榮にもいやまさりたる光輝を以て再び世界を照らすが如く、人類の罪故に死して一たび墓に葬られたる彼は、死と陰府の權力に打勝ち、三日にして墓の中より復活したのである。彼は甦らねばならぬ運命を有して居つた。彼若し甦らざりしならば彼の贖罪は不慥となり、救の保證は信じ難きものとなる。「イエスは我儕の罪のために解され、又我儕が義と爲られんが爲めに甦らされたり。」とパウロの云へるは此が爲めである。（羅四の二五）

吾人がキリストの復活に參與することを得て、自らも亦復活するを得るは、決して偶然ではない。是れ前に論じたる彼と吾人との密切なる關係之をして然らしむるのである。吾人の頭首たる彼の死がその肢たる吾人の死を意味するが如く、吾人の頭首たる彼の復活は亦その肢たる吾人の復活をも意味するのである。されば主は宣ふた。「我れ生れば爾曹も生ん。」（約翰一四の一九）と。

尙ほ復活狀態につき一言せんに、その復活は心靈に關るものと肉身に關るものとの二方面がある。このうち心靈的復活に關しては殆んど何人も之を疑はぬが、肉身的復活に關しては之を信ぜぬ人が多い。併し基督の復活が吾人の肉體の復活を豫表することは聖書の敎である。そも〳〵聖書の敎によれば、吾人は基督を信ずるによりて、心靈は勿論、その肉體までも甦らさるゝ者とせられて居る。

「既に爾曹キリストと偕に甦りたれば天に在るものを求むべし。」（哥

羅三の一〇)「我儕も皆な曾て其中にをり肉の慾に循ひて日を送り肉と心の慾ふ任をなし他人の如く本性にして怒の子なりき。然るに矜恤に富る神我儕を愛する所の大なる愛により罪に死し時にすら我儕をキリストと偕に生し(爾曹恩に由て救れし也)又イエスキリストに在る我濟を彼と偕に甦らせ天の處に坐せしめ給へり。」(以弗二の三―六。)

以上二ケ所の本文は明かに吾人の靈的復活を云へるものであつて、此復活よりして吾人は新性質聖生活に進歩發展するのである。「凡そ眞實なること凡そ敬ふべきこと凡そ公義こと凡そ清潔こと凡そ愛すべきこと凡そ善稱あることすべて如何なる德如何なる譽」にも吾人が成長發展するを得るはこの靈的復活より發原するのである。

併し肉體の復活も基督を信ずるものに授けられたる約束である。曰く「凡て父の我に賜し者我れ一をも失はず末日に之を甦らすは即ち我を遣しゝ父の意なり」(約翰六の三九。)新約の聖徒は復活の希望を以て時の困難に堪へた。パウロはキリストに在る者の靈的復活と共に肉體の復活をも明言した。讀者若し羅馬八の一八―二五。腓立三の七―一四。此二ケ所を精讀せられなば彼が肉體の復活を以て基督を信ずる者に與へられたる特權の一とした事が明かになる。爾來一千九百年の久しき、正統教會が「肉體の復活」を以て其信條の一條目として居る事は決して偶然でない。

人或は問はん、「死せる者如何に甦るや」と。吾人は道理を以て此問に答ふる力を有たぬことを自白する。併し基督の約束と聖書の教によりて、死せるものゝ必ず復活すべきを確信する。而してその復活體につきては二つの事を云ふことが出來る。夫はその體は再び朽ることのなき靈體であること、彼の復活後に於ける基督の體に類

したるものであるべきことである。

第四　最も重要なる實際的問題

吾人如何にして能く主基督と偕に死し又能く彼と偕に甦ることを得るや、是れ凡て基督を信ずる者に取りては至要問題である。此一死一生を全ふするため吾人は吾人の側面に於て主キリストに對する誠實なる信仰熱烈なる愛眞心よりの献身絶對的服從等すべて必要とせられて居る。併し吾人の決心や信仰丈けでは兎ても此大事を成就する事は出來ぬ。吾人自己の力にては自ら死することさへ出來ぬ、矧んや甦ることをやである。茲に於て吾人はキリストの「永遠の靈」(希伯來九の一四)によりて自己を献げ給ひし如く、又聖靈の能力によりて甦らされ給へる如く、神の靈によりその能力の活用によりて

彼と偕に死にもし亦甦りもすべきである。

「神既に主を甦らせ給ふ又その能力を以て我儕をも甦らすべし。」(哥林前六の一四)

「若イエスを死より甦らしし者の靈爾曹に住ばキリストを死より甦らしし者はその爾曹に住ところの靈を以て爾曹が死すべき身體をも生すべし」(羅馬八の一一)

嗚呼聖靈を受くること是れ吾人が基督と偕に死し又彼と偕に甦ることを得るための最要條件である。茲に到つて讀者は研究の順序として「如何にせば聖靈を受け得る乎」と問はれるであらう。然りその事こそ實に基督信者の緊急問題である。吾人は此所に此問題に答ふるの餘地を有せぬ。併し此小冊子と同時に出版せらるる「基督信者の緊急問題と題したる小冊子は幾分か讀者の參考になるであらう

と信ずる。

基督信者の一死一生終

明治四十二年[illegible]月[illegible]日印刷
明治四十二年[illegible]月[illegible]日發行

著者　星野光多

發行者　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　福永文之助

印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

發行所　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　警醒社書店　電話新橋一五八七　振替貯金口座壹壹番

印刷所　横濱市山下町八十一番地　福音印刷合資會社

不許復製

259
448

宣教開始五十年紀念

傳道叢書

星野光多君編輯

▲眞の神　山田寅之助君述
▲耶蘇の直說法　阿部清藏君述
▲神の現在　武本喜代藏君述
▲運命と信仰　柏木義圓君述
▲久遠實成の基督　平田平三君述
▲有情の神　光小太郎君述
▲信仰とは何ぞや　大谷虞君述
▲最大の學問　デフォレスト博士述
▲純福音　星野光多君述
▲神を知る道　釘宮辰生君述
▲基督の救　露無文治君述
▲生命の福音　今井壽道君述
▲福音の眞髓　有馬純清君述

（其他續々刊行）

○基督教叢書

星野光多君編輯

△基督教辯証論　有馬純清君著
△基督教の本原眞理　露無文治君著
△聖書の價値　高橋卯三郎君著
△舊約聖書文學一班　今泉眞幸君著
△福音書概論　山鹿旗之助君著
△保羅と其著述　宮川巳作君著
△基督の比喩　八濱德三郎君著
△耶蘇の三大觀　星野光多君著

△基督の復活　小野弘道君著
△靈魂不滅論　柏木義圓君著
△現世生活　山田寅之助君著
△現世と未來　武本喜代藏君著
△基督教の中心事實として祈禱　星野光多君著
△基督教小史　柏井園君著
△ジョン、カルウイン傳　松永文雄君著

各一部　定價　金廿錢　郵稅　金四錢

（星野氏修養三書）

△基督教談叢（朝の卷）　紙數四百頁　定價　金七十五錢　郵稅　金八錢
△基督教思林（夕の卷）　紙數四百二十頁　定價　金七十五錢　郵稅　金八錢
△基督教通觀（聖日の卷）　紙數五百三十頁　定價　金壹圓　郵稅　金十錢

特51
264

基督信徒の 一死一生

国立国会図書館

020530-000-7

特51-264

基督信者の一死一生

星野 光多／著

M42

ABI-0343